

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年 6月 9日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・D1
氏名	戸部 有紗

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県 幸島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
2023年 5月 15日 ~ 2023年 5月 21日 (7日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター 杉浦秀樹准教授、幸島観察所 技術職員 鈴木崇文氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航では、野生動物・行動生態野外実習として、宮崎県幸島での無人島フィールド調査体験およびニホンザル集団の行動観察と、宮崎県都井岬での御崎馬の行動観察をおこなった。
・スケジュール
5/15 集合/幸島での食料調達/幸島観察所にてフィールドワークの準備 5/16 幸島へ出発/ニホンザルの観察/野営準備/山中散策 5/17 ニホンザルの観察/山中散策 5/18 観察所に帰宿/休息/発表準備 5/19 都井岬での御崎馬の行動観察 5/20 観察所前の海岸林散策/観察成果発表 5/21 片付け・清掃/帰宅
・幸島にて
幸島でのフィールド体験は、主に無人島でのサバイバル経験と、山中での歩き方の習得、また、ニホンザルの行動観察を通じた野生動物の行動観察の基礎の習得を目的として行った。 行動の記録を目的とした野生動物の観察経験と、霊長類を対象とした観察は初めてであったため、試行錯誤しながら臨んだ。社会性を持つ彼らの行動は、非常に興味深く、様々な疑問が生じた。特に私が疑問に思ったのは、「独りで行動する個体」についてだった。人間社会においては特に近年、集団に身を置かず、一人であることを好む人々が増加している傾向にある。ニホンザルにおいて「独りでいる」行動は、どのような過程で生じるのだろうか。観察の結果、やはり群れ内でのランクの違いがまず影響しているようだった。ランクの低い個体や、群れに所属したいができない独りオスが、餌となるムギにありつけず、単独で様子をうかがっている行動が目立った。その次に目立ったのは、ランクの高いオスが散らばった群れの間を一人で巡回する行動であった。また、そのようなオスは他個体からのグルーミングに対して、突然拒否をして追い払い、一人に戻る、という行動も見られた。この行動が性格によるものか、ランクの高さを誇示したものかは分からないが、ランクが中間の個体はほぼ一人で過ごす時間がなかったことから、少なくともランクが上位でない個体は、「好んで」単独でいるような事実はないと推測された。 ニホンザルの観察を通して、データから行動を理解することの難しさを痛感した。データを取得する前に、どのようなデータが研究を遂行する上で必要となるのかについて、十分に考えることが重要であると感じた。 山中での散策では、タヌキのためフンが高頻度で見られ、高密度で生息していることが予想された。幸島のタヌキの個体数は増減を繰り返しており、数十年に一度、幸島が本州と繋がった際に、本州から新たに移入する個体もいるらしい。面積のとても小さな島の中で、ニホンザルとタヌキがどのように共存しているのか(できているのか)、という点も大いに疑問に思った。 また、幸島では野外の限られた物資の中で生きる、という貴重な経験もした。山中での散策は、登山道

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

がはっきりしない中、GPSや地図に頼って散策する経験も積み、今後の自身の研究でのフィールドワークにも生かされるだろう。



グルーミング中のニホンザル



タヌキのためフン

### ・都井岬にて

都井岬では、御崎馬の観察をおこなった。御崎馬はもともと家畜だった馬が野生化した馬で、都井岬にのみ生息している。複数の小さな群れを形成し、群れごとに等間隔に点在していた。警戒心は非常に薄く、人間のことは気にも留めていないようであった。ちょうど出産の時期であったため、生まれたての仔馬も見ることができた。警戒心が薄いため、長時間観察をおこなうことができ、オス馬のフレーメンなどの様子も観察された。基本的には場所を決めると、あまり移動せずに草を採餌し続けている印象であったが、車で別の場所へ移動したのち、離れた別の場所で同一の群れを発見したこともあり、行動範囲は意外と大きいようであることが分かった。野生動物研究センターの卒業生である前田玉青氏にドローンでの馬の位置の記録などの方法も見せていただき、最新鋭のフィールド機器での研究の様子は大変興味深かった。

都井岬ではアナグマも観察され、こちらも警戒心が薄いように見えた。観光客も多数見られ、人と野生動物との関係性についても研究ができそうな場所だと感じた。



フレーメンをする御崎馬

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【[report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp](mailto:report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp)】宛にご提出ください。

### 6. その他（特記事項など）

実習中は、杉浦秀樹准教授、鈴木崇文氏、前田玉青氏にご尽力いただき、充実した日々を過ごせた。重ねて深く感謝申し上げます。

**「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書**  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)